

〔研究ノート〕

アメリカにおける乳児保育の現在と今後*

大方 美香**・玉置 哲淳**・メアリー・ミクマレン***

本稿は、「アメリカにおける乳児保育の現在と今後」（日本保育学会実行委員会企画シンポジウム）におけるメアリー・ミクマレン（Mary McMullen）教授の講演内容を軸に、わが国の乳児保育の現状と課題について問題提起するものである。前半では、ミクマレン教授が近著において定義した、「生まれてから3歳までのDAPの7つの哲学的原理」を提示する。また、後半では、「保育の継続性」や「主担当保育者による保育課題」の事例を取り上げながら、DAPの考え方に基づいた「関係性を原理とした乳児保育」を提示する。ミクマレン教授の提案をどのように受け止め、わが国の乳児保育の発展させていくことができるのか、「関係性」の意味を軸に整理を試みた。

キーワード：乳児保育、DAP、関係性、保育の継続性、主担当保育者

I、シンポジウムの経緯と意味

1、シンポジウム開催に至る経緯

大阪総合保育大学には、2013年に開設した「総合保育研究所」があり、5つのプロジェクトがある。「乳児保育」プロジェクトでは、2013年4月より2014年3月までの18回、ほぼ毎月研究会を行ってきた。この2年間の研究テーマは、「乳児保育計画」に視点をあてた「事例及び指針の検討」であった。このために保育所保育指針を枠組みとして実際の事例を収集し、分析してきた。

事例は、1965年保育所保育指針を背景としたタイプと2008年保育所保育指針を背景としたタイプに整理することができた。その成果は一部発表している（大方2012）が、これは、「総合保育双書（2014）」にまとめた。

「乳児保育」プロジェクト研究会が整理したことは、次の3点である。

① 乳児保育の指導計画の作成においては、保育者というおとなの役割が重要であるにも関わらず、乳児に対するおとなの関係性を重視した事例が少なかった。保育者主導であったり、子ども中心であるために偏ったりという傾向があった。この意味では、現行保育所保育指針（厚生労働省2008）が示す「保育士等がしなければならない事項」と「子どもが身につけることが望まれる心情・意欲・態度などの事項」を軸として、この2つが融合して保育者の役割を明確にする必要があるのではないかと考えた。

② 1965年保育所保育指針を枠組みとして採用している事例では、系統的に活動の選択・

*翻訳 幸田 美沙****・佐伯 知子**

**大阪総合保育大学

***インディアナ大学

****大阪城南女子短期大学

配列を行う「活動中心タイプ」が多く見られた。2008年保育所保育指針を背景とする事例では、環境を通した子どもの主体性を尊重し、一方で子どもの育ちを領域別に分けてねらいを大切に「ねらい中心タイプ」が多く見られた。

③ プロジェクトでは、この2つの編成論を土台とした乳児保育の視点を提案してきた。乳児保育は、どの段階で保育実践に向かって融合していくのかを保育者は意識することが必要であることがわかった。

2、企画趣旨

シンポジウムにおいては企画の趣旨として、以下の点を大方（一般社団法人日本保育学会プログラム2014）が説明した。

アメリカからメアリー・ミクマレン教授を招聘して、一般社団法人日本保育学会第67回大会（2014年5月18日）において大会実行委員会企画シンポジウムを開催した。シンポジウム企画にいたる経緯と企画趣旨を説明する。

なお、本シンポジウムは、大阪総合保育大学総合保育研究所の乳児保育プロジェクト（代表：大方美香・玉置哲淳）の3年間にわたる研究をふまえたものであり、同研究所及び乳児保育プロジェクトの研究員の方々の援助と協力の下に実施した。

2015年の子ども・子育てに関する制度改革を控え、日本はあらゆる視点から乳児保育のあり方が改めて問われる時代になった。幼保一体化、家庭と保育所の関係、教育と保育の関係といった日本の保育をめぐる全ての議論が乳児保育のあり方と連動していることは明らかといえる。幼保一体化の中で乳児の保育はどうあるべきか、待機児対策としての乳児保育の量的拡大だけではなく保育所保育の質の転換はどうあるべきか、直接の問題として乳児保育のあり方が問われてきている。

2008年に改定された保育所保育指針は、多様な編成論を容認する立場であり、よって保育現場での考え方は多様である。保育所保育指針が提示している「子どもの最善の利益が図られること」は当然であるが、具体的にはどうあるべきなのか、その理論と実践の角度から検討することは未整理であり、さまざまな課題が考えられる。また、子どもの立場に立った理論と実践の構築は急務であり、相互交流を意図すべきであるが、問題意識は不明瞭なままである。

このような現状を踏まえ、企画の軸は、「乳児保育のプログラムはどうあるべきか」であり、この課題についてシンポジウムを企画した。

本シンポジウムは、全米幼児教育学会（National Association for the Education of Young Children、以下、NAEYCとする）に着目し、同学会が作成した「発達上適切な実践」（Developmentally Appropriate Practice in Early Childhood Programs、以下、DAPとする）の紹介と、乳児保育のあり方について大きな転換を遂げつつあるアメリカの保育プログラムから学んだ。そのプログラムは「関係性アプローチ」と呼ばれる理念に基づき、具体的な保育プログラムを提示している。アメリカの保育プログラムは、日本の保育と同じ発想の部分と異なった発想がある。

シンポジウムでは、DAPのプログラムの作成の中核を担ったミクマレン教授をキースピーカーとして上記の課題に迫った。乳児保育の関係者の必須のシンポジウムである。

この趣旨をふまえ、日本の乳児保育の考え方とその実践を豊かなものとするためには、アメリカの保育などに学ぶことが大切ではないかと考えた。NAEYCでは乳児の保育についても「関係性アプローチ」など新しい考え方を提案している。ミクマレン教授は「関係性アプローチ」についてどのような考え方であるのかを学び、提起を受けたいと考えた。また、日本における乳児保育（たとえば、保育所保育指針）の考え方とは、「何が同じなのか、何が同じではないのか」を整理し、乳児保育のあり方について検討できればと考えて企画した。今回のシンポジウムが、乳児保育の質を高め、乳児保育理論の再構成を考える契機になればと考えている。（文責 大方・玉置）

II、NAEYCにおける乳児保育の位置づけ

以下、II～Vは、メアリー・ミクマレン教授による講演内容の書き下ろしである。アメリカにおける発達上適切な実践（DAP）哲学の概要とともに、ミクマレン教授が近著において定義した、「生まれてから3歳までのDAPの7つの哲学的原理」が提示されている。

1、NAEYCでのDAPの意味

DAPを初めて論じたのは、1987年、ブレデキャップ（Bredekamp）とコップル（Copple）がNAEYC（the National Association of Early Childhood Education, 全米幼児教育協会）から出版した書籍においてである。この出版によって、DAPは、アメリカにおける「最善の」もしくは推奨される実践の象徴となり、世界中の多くの国において採用されている。DAPの哲学は、進行中の研究や学問的な調査に基づき、定期的に改訂されている（Copple & Bredekamp, 2009）。DAPの批評の多くは、この発達理論への信頼性と多様な人々への応用性に対して行なわれている（Kim & McMullen, 2012）。

2、統一の哲学

アメリカには、早期教育や高校までの教育に関する全米の国家的カリキュラムはなく、早期教育や高校までの教育に関する統一した方針がない。それぞれの州は、生まれてから3才までの保育や就学前教育の実践に関して、独自の法と基準をもっている。NAEYCによるDAPの導入とNAEYCが開催しているアメリカの全米認定プログラムは、実践に関する情報を提供しつつ50の州それぞれの異なるシステムに対して、統一の指標となる構造としての役割を果たしている。DAPに基づいた提案は、乳児保育や就学前教育に関する州の法律に組み込まれており、保育の実践者は、保育者においてDAP哲学に基づいた訓練を受けている。

統一の哲学として、DAPの総合的な目標は、乳児保育における現在と未来にわたる、総合的で健康的な成長、発達、学び、幸せを保障すること、またその実現に向け、全ての子どもに支援的な役割を果たすことである。批判はあるものの、DAPは、確かな理論と研究、そして実践者による何十年もの経験に基づいている。この哲学は、家庭生活の経過を考慮してそれぞれの子どもを支援することに関する、個々の保育者の強い価値観や信念、保育者としての倫理観の確固とした姿勢の上に成立している。この哲学には、保育者が、世界に関する広く深い知識を有した教養ある人間であることが必要である。また、長年の

経験と力強いメンター制度（助言者制度）を通じて、特に乳幼児に関わって働く際の技術や能力を習得し、専門領域において「最善の」実践あるいは推奨される実践を乳幼児に対して行なうことも必要である。（幸田 訳）

Ⅲ、乳児保育に対するDAPの実践哲学

1、DAPの役割と7つの原理

DAPは哲学である。それは、子どもの捉え方、成長・発達・学習の方法、最善の対応方法を示してくれる軸となっている。DAPが実践を規定したり指示したりすることはない。DAPは、プログラムのモデルやカリキュラムを規定するものではなく、視点を提供するようなものである。この視点を通して、集団保育・教育の場面で、子どもやその家庭との関わりを見たり考えたり分析したりするのである。以下、特に注目し、熟考すべき領域である7つの原理について述べていく（McMullen, 2013）。

2、原理1：多様な影響を理解する

多様な影響を理解するというDAPの1つめの原理は、保育者が子どもに経験させることを計画し成長度を評価する際、それぞれの側面を個別にみるのではなく、全体としてみることを求めている（Copple & Bredekamp, 2009）。

第一に重要なのは、生まれてから36か月の期間に、保育者に特定の対応を求める3つの明確な発達上の特徴が示され、欲求が表現されるということ認識することである（Lally & Mangione, 2008）。生後間もないひとり立ちする前の乳児（生まれてから6か月か8か月くらいの子供）は、「安全を求める存在」として特徴づけられる。子どもたちの労力のほとんど全ては、信頼ある関係性を通じて、安全であるという感覚を獲得することに注がれる。ヨチヨチ歩きを始めるようになると、12か月から18か月頃までには、安全基地をまだ必要とはするものの、特徴的な活動やエネルギーの大部分を探索に費やすようになる。もう少し成長すると、安全性を感じて探索にも躊躇がなくなり、自己認識に注目し始め、自己理解・他者理解に関連した行動をとるようになる。写真1から写真3は、この生まれてから3歳までの発達の時期を示したものである。

全体としての子どもをみるために、主な発達の側面全てを同時に考慮することが重要である。つまり、身体的健康と成長、認知的発達、知覚の発達、微細・粗大運動筋の発達、社会性の発達、情緒の発達、子どものコミュニケーション能力である（Berk, 2012; Bjorklund, 2012）。これらの機能は、互いに影響し合い完全に統合した形で成長・発達するので、全てを同時にみる必要がある。これらの複雑な要素を一緒にし、発達が発生する家庭・文化・地域社会の文脈を考慮に入れて初めて、個々の子どもを全人的な存在として理解することができる。そうすることで私たちは、個々の成長・発達・学習ニーズへの最善の対応方法を理解し始めることができるのである。

3、原理2：全ての子どもと家庭を含める

このDAP原理は、保育者がすべての乳幼児とその家庭を、信仰・環境・欲求・言語・コミュ

幼い乳児

0歳から6-9か月
焦点：安全



ヨチヨチ歩きの乳児

6-9か月から12-18か月
焦点：探索



前期幼児

12-18か月から36か月
焦点：自己認識



写真1-3 生まれてから3歳までの発達段階別の3つの期間。
ヘンリー4か月、12か月、34か月の頃。

ニケーション方法に関わらず、保育所に迎え入れているかを考えさせるものである。家庭と子どもは、思いやりがあり受容してくれる保育者に尊重され支援されていると感じることが重要である (Copple & Bredekamp, 2009; Gonzalez-Mena, 2007; Pianta, Barnett, & Justice, 2012)。歩いたり、ハイハイしたりする全ての子ども、保育所のプログラムに参加する全ての子どもとその家庭に対し、私たちは保育者として対応しなければならない。全ての子どもが保育所に入るための準備をしているとは考えにくいのである。

こうした対応と受け入れ態勢は、全ての子どもに与えられるものである。乳幼児の発達上の課題や病気の有無、障害の状況に関係なく、また、家族が特別な支援や何らかの養育上の障害に直面していようと関係ない (NAEYC, 2011)。こうした状況は時に、過去の信念や先入観があるために、あるいは保育所に迎え入れる準備不足のために、保育者としての能力を要求してしまう。保育者が子どもに最善の保育と教育的支援をどうすれば届けることができるかを知るには、追加の手段や専門的訓練が必要である。

4、原理3：家庭を中心とした保育を提供する

家庭を中心とした保育とは、乳幼児の支援をする際に、家庭と完全な連携をとることにある (Keyser, 2006; Pianta, Barnett, & Justice, 2012)。家庭は、患者や客としてではなく保育のパートナーとして尊重され、家庭が乳幼児に関して行う決定は、尊敬され尊重されるものである。保育者は、乳幼児の発達や初期の学びに関する知見や専門的知識を家庭と分かち合い、反対に、家庭は自分の子どもに関する知見や専門的知識を分かち合う。目標は、家庭がエンパワーされていると感じ、子どもの発達を支援する力をつけていると感じることである。このように家庭を中心とした保育とは、乳幼児のために家庭と共に専門性をもった保育をすることであり、家庭のために行なう保育のことではない。保育者は家庭と信頼関係を築くことで、子どもの最善の利益のために共に働くことができるのである (Gonzalez-Mena, 2012)。

5、原理4：子どもの家庭と文化を尊重する

家庭と文化を尊重するというDAPの哲学は、保育者に「子どもの背景にある文化の違いを知ってそれに応答する」保育に気づかせる。これは、子どもの自己認識の発達に直接関連する原理である（Hyson, 2003; Lally, 1995）。この原理が想起させるものは、保育者は、乳幼児とその家庭に伝えるあらゆるメッセージに注意しなければならないということである。メッセージは、言語的／非言語的なもの、保育者が感じる正しい／間違い、普通／普通ではない、良い／悪い、といったものである。これらのメッセージは、自分が愛を受けるに値する人間かどうか、自分の家庭が受容されるに値するものかどうかという、子どもの認識に影響する（Derman-Sparks, 2010; Gonzalez-Mena, 2007）。よって、保育者は家庭や文化的繋がりを含め、全ての子どもの自己認識を支援するよう意識的に行動することが重要なのである。

6、原理5：子どもの権利を尊重する

子どもの権利に関するこの原理は、保育者に、参加する市民としての乳幼児の権利と幸福を含めて、乳幼児を保育する際の道徳や倫理観に注目させるものである。子どもの権利という観点からみれば、幸福とは、「将来その子どもがどのようなようになるのか」もしくは将来における可能性を評価することはもちろん、今、「子どもがどんな人間であるか」、つまり1人の子どもであるための権利(保育をしてくれる大人がいる健康で安全な環境の中で、遊び、学び、成長すること、など)を意味している（NAEYC, 2011）。市民という点でいえば、アメリカでも日本でも、子どもは民主的な社会で十分に市民として参画するよう位置づけられている。このように、乳幼児は生まれてすぐの段階から、権利をもつとはどういう意味か、市民として尊重されるとはどういう意味かを経験する必要がある。乳幼児は、学習者中心の自由遊びや、集団の一員として意思決定に参加することを経験すべきである（Dewey, 1997 & 2012; Gartrell, 2012）。経験はきっと、乳幼児の考えや興味や好みを包含するものである。乳幼児は、支援的で信頼できる大人に導かれながら、選択したり力を分かち合ったりするという、初歩的な民主主義の諸原則を、自然に当然の結果として学ぶことを経験が助ける。

7、原理6：システムを通じて保育の文化を創る

この原理は、保育者に保育システム全体を熟考させ、様々な段階における、保育と関係性の大切さに注目させる（Mann & Carney, 2008; McMullen & Dixon, 2009）。子どもとの関係性、子ども同士の関係性、子どもを取り巻く関係性は、健全な脳の発達やあらゆる身体的・心理的幸福に影響を与える（Bronfenbrenner & Morris, 2006）。それは、思いやりのある対話や交流の手本となる。こうした健康的な発達は、大人との肯定的で情緒的な雰囲気を必要とする。乳幼児は、親しい人に世話をしてもらい、また自分の周りの思いやりのある関係性や交流を手本としながら人との関係性について学ぶのである（Eisenberg & Mussen, 1989; Noddings, 2003）。保育者は、子ども・家庭・同僚・管理者・日々のプログラムに参加するあらゆる人々と関係性を作り、乳幼児の育ちに時間と労力を費やさねばならない。

8、原理7：センシティブで応答的な保育に従事する

DAPの最後の原理は、センシティブで応答的な保育についてである（Gonzalez-Mena, 2012; Lally & Mangione, 2008）。これは、乳幼児との会話をすぐさま感じ取り、心を込めて応答することを意味している。即時的で気持ちの込もった保育者との応答的交流は、集団保育における、子どもと大人の信頼と安定した愛着関係の発達と子どもの自尊感情の育ちに関わる。（Honig, 2002; Riley et al, 2008）。安心へと導く信頼は、関係性の産物である。また、知識に基づく関係性は、時間をかけて形づくられる。このように、乳幼児との会話にセンシティブで応答的であるためには、保育者がそれぞれの乳幼児をよく知っていることが大切である。

センシティブで応答的であるという心に寄り添うことが意味するものは、乳幼児と十分一緒にいること、乳幼児に一心に注意を向けること、対話する相手として一人前に扱うことである。乳幼児の心に寄り添うことは、気持ちがつながっている状態である。応答する際には、乳幼児の情緒的な状態を重視し、感じ、理解し、それらに合わせることである。エドワードとレイクス（Edwards & Raikes）（2002）は、この状態を「関係性のダンス（dance of relationship）」と呼んでいる。写真4と写真5は、子ども－保育者間の心に寄り添った響き合いを示したものである。

センシティブで応答的であることは、私たちが乳幼児の対話を理解し、できる限り即時的に応答するタイミングに関係している。センシティブで応答的な保育のタイミングに関わるもう一つの側面は、重要な保育の日課において、ゆっくりと、決して焦らないということである。忙しい日々の中で乳幼児と1対1で過ごせる機会は、個別の保育の時である。特に、オムツ換えやトイレ、食事、睡眠の時間である。この時間は信頼を築き関係性を強化する時間、個々の乳幼児をより良く理解できるようになる時間として大切にされるべきである。（幸田 訳）



写真4、5 センシティブで応答的であるということは、おとなが「情緒的に調和」し、「タイミングを逃さず」十分に心に寄り添うということである

IV、プログラムの考え方

1、実践の要は関係性

DAPは、特定の行為を定義し規定するものではない。DAPが示すものはまさに、強く前向きで尊重できる関係性を形成し育てていく実践である。保育の継続性と主担当保育者（キーパーソン）による保育は、論じてきたDAP7原則の当然の産物であり、アメリカで推奨される実践を構成するようなものである（Edwards & Raikes,2002; Lally & Mangione, 2008; McMullen 2012）。

2、保育の継続性

アメリカの伝統的な乳幼児集団保育の実践は、次のような基準に基づいて子どもたちを部屋から部屋へと移動させ保育者を変えてきた。身体的発達の日安への到達度（例えば、ハイハイするようになること、歩き始めること、オムツが外れること、など）、誕生日（例えば、1～2歳に達すること）、もしくは毎年の典型的な学年暦。発達や誕生日に基づいた転換は、絶え間なく子どもたちが去っては新しくやってくる「回転ドア」のようなものである。

結果としてそれは、グループ・ダイナミクスや全体的な情緒的雰囲気を変えず変化させている。1年おきの転換は、常に出入りがあるような状況を避けるものかもしれないが、グループが変わらないのはせいぜい9か月程度である。伝統的な手法は、安心できる愛着関係を形成する上で重要な、長期的な信頼関係を構築していくにはいずれも最適ではない。事実、複数回にわたる転換やそれに伴う重要な関係性の断絶や再交渉は、乳幼児にとって有害かもしれない（Cryer, Hurwitz, & Wolery, 2001; Cryer et al., 2005; Hegde & Cassidy, 2004）。

DAPの哲学が実践面で意味することは、子どもとかれらを保育するおとなが長期間一緒にいられるということである。その関係性は、集団内のすべての人（保育者、子ども、家庭）と人をつなぐことを可能にしている。保育の継続性が促すのは、集団内のすべての人ができる限り長い間一緒にいることである。就学前の3年間ずっと一緒の場合もある。さまざまな家具や設備、道具や日用品そして部屋は変わることもあるが、主担当保育者は変わらない。ゆえに、関係性も変わらないのである。保育者の知識や理解、そして乳幼児やその家庭の信頼や安心感は時間をかけて深められていく。それらはすべて、空間や関係性の転換による妨げがないところで強まり成長するものなのである。保育の継続性によって、保育者は、子どもと一緒に発達を経験することができ、実際に時間をかけてそれを見ることができ、子どもたちや家庭のメンバーとの情緒的な結びつきを強めることができる。

最近の研究の中で、保育者は、保育の中で子どもたちと最初の3年間を過ごせることが大切であること、そしてそのことが自分たちの子ども理解を促し、スムーズで途切れのない発達に貢献していることを語っている（McMullen, Kim, Mihai, & Yun, 近刊）。同研究において親たちは、他の研究（Hedge & Cassidy, 2004）の中でも指摘されているように、継続的な保育の中で形成される保育者と赤ちゃんとの強く愛情あふれる結びつきはもちろん、保育者によって得られる知識に対しても感謝の意を表している。

3、主担当保育者による保育

DAPの関係性に焦点を当てた保育のもうひとつの重要な側面は、乳幼児に対し、「主担当保育者」(Lally et al, 1995) や「キーパーソン」(Elfer, Goldschmied, & Selleck, 2003) を割り当てることである。こうした実践は、ある保育者がグループ内の少人数の乳幼児の主担当保育者となるものであるが、一人で抱え込んで責任を負うものではない。そこには、そのより小さいグループの乳児と、安心できる特別な愛着関係を構築するというねらいがある (Zero to Three, 2012)。主担当保育者は、小グループの乳児一人一人について多くの保育ニーズに対処し、記録をとり続け、家庭と密に連携して動く責任がある。すでに述べたように、主担当保育者は、小さなサブグループともいえる特定の乳児や家庭と親密になり、かれらをよく知るようになるが、それは排他的な関係性ではない。主担当保育者は、あらゆる子どもや家庭に応答し、かれらと協同するのである。

二次的な愛着形成による安心感 (secondary attachment security) の研究で著名なリチャード・ボウルビイ (Richard Bowlby) (「愛着理論の父」として知られるジョン・ボウルビイ (John Bowlby) の息子) は、保育の中でキーパーソンを割り当てることの重要性を強く感じ、子どもたちのためにそれをイギリスの法律に盛り込むことを提言した (Bowlby, 2008)。愛着研究が受け継いでいるものは、子どもの社会的・情緒的発達を促す、安心・信頼できる関係性の大切さを理解することである。そうした研究を行った学者としては、ジョン・ボウルビイ (Bowlby, 1988) やメアリー・アインズワース (Mary Ainsworth) (Ainsworth, Blehar, Waters, & Wall, 1978)、そして近年ではリチャード・ボウルビイやアリス・ホニング (Alice Honing) (Honig, 2002) が想起される。(佐伯 訳)

V、結論

DAPは哲学である。それは、家庭と連携しながら、幼い子どもたちの今と未来の幸福を保障するために、何が正しくよいことで何が必要なことかを考える手段である。DAPの中核部分は、子どもたちをかけがえのない個人として尊重すること、かれらの人生に関わるあらゆる人の間に思いやりのある支援的な関係性を構築することである。乳幼児のためのDAPの7原則は、保育者が経験について考え計画し、集団保育の環境で乳児や家庭の人と行うあらゆることを、その事前・最中・事後に省察するための枠組みを提供している。

保育の継続性や主担当保育者による保育は、7原則の実施を促すものである。それによって保育者は、尊敬や関係性に焦点を当てた保育の諸要素を実践に移すことができている。継続性や主担当保育者による保育は、時間やエネルギーを積極的に注ぐことや長期的な関係性を要求しており、結果として、以下のようなことを行うために必要な知識を深めていく。子どもに与える多様な影響を理解し、総合的に経験を計画したり進歩を見極めたりすることに役立てること。子どものニーズや興味の伝え方を理解し、保育者による敏感で応答的な保育への関わりを促すこと。家庭中心の保育を提供するために必要な職務上の連携を進展させること。

DAPを何よりの中心的な信念体系とする保育者は、一人ひとりの人間としての尊厳を尊重している。ゆえに、あらゆる子どもや家庭を視野に入れ、子どもの権利を尊重し、子どもが生活している家庭や文化に敬意を払うのである。主担当保育者による保育を通じて

構築される深く有意義な関係性や、継続的な保育を通じて構築される長期的な関係性は、かなり幼い子どもに対し、初期の自己認識や居場所の感覚を支える安定した基盤を提供している。乳幼児は、敬意に満ちた関係性に焦点を当てた保育による安定性を受けてしかるべきである。かれらは、個人としての権利が尊重されるときに成長するが (McMullen et al., 2009)、システム全体で保育文化を創造しようと努めることのない環境下で生まれる混沌や退屈や混乱といったものには苦しむのである (McMullen, 2010)。

発達の中で最も大切な最初の3年間に、関係性に焦点を当てた乳幼児を尊敬する保育を行い、乳幼児を市民として支援することは、その存在や育ちにおいて次のようなねらいを達成させていくものである。

身体的に健康であること、情緒的・社会的に強く有能であること、巧みなコミュニケーターとなること、優れた学習者・問題解決者となること (Abbott & Langston, 2005)。本論で述べた全人的な考え方は、あらゆる乳児の心 (mind) (探索し、考え、問題解決できる能力)、身体 (body) (全身の健康的な発達、運動機能の発達)、精神 (spirit) (自己を創造し表現する自由)、魂 (soul) (コミュニティやグループに所属し関係性をもつこと) の育ちを支援するものである (McMullen, Buzzelli, & Yun, 近刊)。私たちの乳児は、私たちがかれらのために行なっている最善の努力を受ける価値がある。それは、同じメンバーとして一緒に、グローバルな保育コミュニティの構築を目指して行なっているものである。(佐伯 訳)

VI、講演の意味—継続性と関係性

メアリー・ミクマレン教授の講演内容における「保育の継続性」や「主担当保育者による保育課題」の事例を取り上げながら、DAPの考え方に基づいた「関係性を原理とした乳児保育」を提示していきたい。

ミクマレン教授の講演は、DAPの考え方を踏まえて提起されたものである。本稿で述べられた7つの原理とその実践の核として継続性と主担性を述べていることは、わが国において全く未知の考え方ではないだけでなく、実践上取り入れられている考え方でもある。

教授はまず、DAPの7つの原理を提案された。

第1の原理では、「子どものある側面をそれぞれ別個にみるのではなく、その子どもの全体像をみることを求め」、発達のすべての領域を「同時に」に見ることを求めている。この場合の発達の側面としては「身体的健康と成長、認知的発達、知覚の発達、微細・粗大運動の発達、社会性の発達、情緒の発達、そして、子どものコミュニケーション能力」を念頭においている。これらが相互に影響を与えるので統合的全体としてみることを提案している。このために、全体としての子どものとらえ方が必要であるというのである。この具体的な提案はNAEYCのDAP (McMullen, M. B. (2013). *Understanding development of infants and toddlers*. In C. Copple, S. Bredekamp, D. Koraleck, & K. Charner (Eds.). *Developmentally appropriate practice: Focus on infants and toddlers* (pp.23-50). Washington, DC: NAEYC.) に示されているので参照されたい。

第2の原理は、すべての子どもは多様な成長と文化を持っているが、そのすべての子どもを受容するプログラムでなければならないという原則である。このことは、家族・地域

社会を受容することと同時であると提案されている。このためには、保育者としての研修を必要としている。

第3の原理は、よって、家庭中心主義の保育プログラムを提唱することになる。それは、保育のプロとして保護者を認めるだけでなく、保護者は子どもの成長について権限と知識を持っているとみなすことを意味するとしている。

第4の原理は、第1から第3の原理を踏まえると“文化的な差異に応答的な”保育を迫る原理となる。つまり、言語的なもの、非言語的なものを含め、保育者が何を正しいと感じ、何を間違っていると感じるのか、何が普通で何が普通ではないと感じているのか、何が良くて何が悪いと感じているのか、を共有するということである。何が普通と考えるのかというのは、乳児保育では常に問われ続けてきたことを明確にしていることは興味深い。それが子どもの自己の成長と関連していると指摘していることは学ぶべきことかもしれない。

第5の原理は、子どもの権利を認めることである。第1から第4の原理の前提は、子どもが遊び、学び、及び成長の権利を持っていることを認めることであり、それは、未来と現在の幸福への権利を子どもが持っていることを提案している。

第6の原理は、子どもの関係性を確立することであり、子どもの成長が可能である保育システムの構築を提案している。特に、親しい関係にある保育者によって保育されることの重要性を述べていることは重要な視点である。

第7の原理は、センシティブで応答的な保育を用意する方向を示している。

具体的には、「関係性のダンス」を提案することによって(関係性のダンスという例えば)、子どもと大人のある調和状態を想定していることは一層興味深い。特に、そのダンスは身振りだけではなく言葉でも示されることは示唆を与えることである。

以上の7つの原理を具体化するためにも、保育の実践のあり方について教授は提案している。すなわち、教授は継続性と主担当者による保育を提起している。

第1には、保育の環境として保育者の継続性を上げている。すなわち、子どもが関係性で育つという原理の具体化として「最初の3年間を主担当保育者と過ごせることが大切である」との視点を提起している。この提案は、乳児の保育における子どもの情緒的なつながり形成の必須の条件としている。これは、ある意味では、保育の家庭化という発想を提案しているとも考えることも可能であり、大変重い問題であるといえよう。よって、保育室の条件は変わっても保育のグループは変わらないとしている。

このことは、もう一つの提案、主担当保育者による保育につながる。つまり、特別の情動的な関係を構築するためにキーパーソンが存在することで子ども理解が深まり、保護者との連携が可能となりパートナーシップが確立すると提起している。このことは、「ある保育者がグループ内の少人数の乳幼児の主担となるものであるが、排他的に責任を負うものではない。」と注意している。

結論部分では、関係性の意味と価値観を重視して保育の変革を提起していることは重要であろう。

以上のことをふまえると、わが国の乳児保育の課題としては次のことが考えられる。

① 現在、日本において、保育を「教育の視点から見直していく」という保育の質の向上の議論が行われ、乳幼児保育は、制度・内容論からいろいろな議論がされている。一方、保育の原点となる乳幼児保育のあり方、特に乳児の内容論が置き去りにされている現状がある。今回のシンポジウムは、「乳児保育の理論と実践」がどうあるべきかを検討し整理したものである。

日本では、幼保一体化の議論がなされ、「幼保連携型認定こども園 教育・保育要領」も施行された。少子化対策・待機児対策は、乳児保育の「量的拡大」を目指している。しかし、同時に、保育所保育の「質的転換」はどうあるべきかの議論はさけて通れない。つまり、乳児保育の直接的な内容や保育の専門職のあり方が問われてきているといえよう。しかし、実際には、幼稚園・保育園・認定こども園という制度についての議論に終始しており、乳幼児保育の内容は、小学校との連携、遊びと学びの接続、発達支援というような視点で議論が行われている。乳児保育の「質的転換」という議論には到っていない。むしろ、この「質的転換」はどのような視点と方法をもつべきかが問われることになる。それは、乳児保育を教育と捉えなおすのかという保育者のあり方を含めて検討する必要がある。

② 「質的転換」の原理の一つとして、アメリカの乳児保育の理論と実践を検討したいと考えている。アメリカの乳児保育は「関係性アプローチ」という考え方を提案していることは重要である。日本では、「母親との情緒的な関係や情動的な関係によってこそ乳児は育つ」というように、「母性を中心とした関係性」を議論してきた。日本の保育者のあり方とアメリカの「関係性アプローチ」は、日本の発想と「何が同じなのか」、「何が同じではないのか」を検討し、整理していく必要がある。これは、これまでの乳児保育の発想をこえるものであるかもしれない。

③ 特に、関係性アプローチの内実を子どもの立場からとらえなおす必要があり、「子どもを尊敬する」という視点が何よりも重要となってくる。その際、「子どもを尊敬する」、「関係性が大切」というが、具体的にどのようなことであろうか。

アメリカでは、人種・宗教・家族関係などを含めた乳児一人ひとりの背景となる「文化」を乳児の「個性」としてとらえていることに着目する必要がある。また、アメリカでは、乳児一人ひとりの背景となる「文化」を考える中で、乳児が尊敬されるということをより実践的に整理していることはDAPからも理解されよう。日本の乳児保育において、アメリカの「子どもを尊敬する」という具体的な実践的枠組みを整理する必要がある。

関係性とは、乳児と主担当保育者の安定した関係をどのようにして築くかが中核の問題である。乳児保育は「養護と教育」について考えてきたが、むしろ大人の役割を位置づけ、関係性に焦点を当てた「保育学」の構築が必要な時代であると考えている。

今回のシンポジウムは、大阪総合保育研究所乳児プロジェクトの2年余の研究から企画された。「乳児保育」は人間としての「ヒト」から具体的な「人」へであり、具体的な「人」から人間としての「ヒト」へという「関係性」の中で営まれる。「子どもは人間であり、保育は子どもを尊敬する。」ということを中心として、「保育学」を提唱したいと思う。(文

責 大方・玉置)

なお、本稿は、4人の共同討議に基づくものであるが、Iは大方・玉置、II・IIIは幸田、IV・Vは佐伯、VIは大方・玉置の文責である。

また、紙数上掲載できなかったが、当日のシンポジウムは、阿部和子教授（大妻女子大学）のご提案、ご協力を経て開催に到った経緯がある。ここに深く感謝の意を表したい。

参考文献一覧

- Abbott, L., & Langston, A. (2005). *Birth to three matters: Supporting the framework for effective practice*. Berkshire, England: Open University Press.
- Ainsworth, M. D. S., Blehar, M. C., Waters, E., & Wall, S. (1978). *Patterns of attachment: A psychological study of the Strange Situation*. New York: Lawrence Erlbaum Associates, Inc.
- Berk, L. (2012). *Child development (9th ed.)*. London: Pearson Education International.
- Bjorklund, D. F. (2012). *Children's thinking: Cognitive development and individual difference (5th ed.)*. Belmont, CA: Wadsworth CENGAGE Learning.
- Bowlby, R. (2008, January). *Attachment, what it is, why it is important, and what we can do about it to help young children acquire secure attachment*. Summary of notes from Sir Richard Bowlby's speech to the Seventh Session of the Working Group on the Quality of Childhood for the European Parliament, Retrieved on June 18, 2014 from: <http://www.ecswe.com/downloads/publications/QOC-V1/Chapters-10-12.pdf>
- Bowlby, J. (1988). *A secure base: Parent-child attachment and healthy human development*. London: Basic Books.
- Bredekamp, S., & Copple, C. (Eds.) (1987). *Developmentally appropriate practice in early childhood*. Washington, D. C.: NAEYC.
- Bronfenbrenner, U., & Morris, P.A. (2006). The bioecological model of human development. In W. Damon & R. M. Lerner (Eds.), *Handbook of child psychology (6th ed.)*, Vol. 1, Theoretical models of human development (pp. 793-828). Hoboken, NJ: Wiley Publishing.
- Copple, C., & Bredekamp, S. (2009). *Developmentally appropriate practice in early childhood programs: Serving children birth through age eight (3rd ed.)*. Washington, DC: National Association for the Education of Young Children.
- Cryer, D., Hurwitz, S., & Wolery, M. (2001). Continuity of caregiver for infants and toddlers in center-based child care: Report on a survey of center practices. *Early Childhood Research Quarterly*, 15(4), 497-514.
- Cryer, D., Wagner-Moore, L., Burchinal, M., Yazejian, N., Hurwitz, S., & Wolery, M. (2005). Effects of transitions to new child care classes on infant/toddler distress and behavior. *Early Childhood Research Quarterly*, 20(1), 37-56.
- Derman-Sparks, L. (2010). *Anti-bias education for young children & ourselves*. Washington, D. C.: NAEYC.
- Dewey, J. (2012). *Democracy and education*. Hollywood, FL: Simon & Brown.
- Dewey, J. (1997). *Experience and education (reprint edition)*. NY: Free Press.
- Edwards, C. P., & Raikes, H. (2002). *Extending the dance: Relationship-based approaches to infant/toddler care and education*. Baltimore, MD: Brookes Publishing.
- Eisenberg, N., & Mussen, P. H. (1989). *The roots of prosocial behavior in children*. Cambridge, MA: Cambridge University Press.
- Elfer, P., Goldschmied, E., & Selleck, D. (2003). *Key persons in the nursery: Building relationships for quality provision*. London: David Fulton.
- Gartrell, D. (2012). *Education for a civil society: How guidance teaches young children democratic life skills*.

- Washington, D. C.: NAEYC.
- Gonzalez-Mena, J. (2012). *Child, family, and community: Family-centered early care and education (6th ed.)*. Upper Saddle River, NJ: Pearson.
- Gonzalez-Mena, J. (2007). *Diversity in early care and education: Honoring differences (5th ed.)*. New York: McGraw-Hill.
- Hegde, A. V., & Cassidy, D. J. (2004). Teacher and parent perspectives on looping. *Early Childhood Education Journal, 32*(2), 133-138.
- Honig, A. S. (2002). *Secure relationships: Nurturing infant/toddler attachment in early care settings*. Washington, D.C.: National Association for the Education of Young Children.
- Hyson, M. (2003). *The emotional development of young children: Building an emotion-centered curriculum (2nd ed.)*. New York: Teachers College Press.
- Keyser, J. (2006). *From parents to partners: Building a family-centered early childhood program*. St. Paul, MN: Redleaf Press.
- Kim, Y., & McMullen, M. B. (2012). Evolving conceptions of the child in early childhood education: Challenging dominant assumptions about “best” practice. *Sophist's Bane, 6*(1), 14-21.
- 厚生労働省 (2008) 保育所保育指針解説 フレーベル館
- Lally, J. R. (1995). The impact of child care policies and practices on infant toddler identity formation. *Young Children, 51*(1), 58-66.
- Lally, J. R., Griffin, A., Fenichel, E., Segal, M., Szanton, E., & Weissbourd, B. (1995). *Caring for infants and toddlers in groups: Developmentally appropriate practice*. Washington, D. C.: Zero to Three.
- Lally, J. R., & Mangione, P. L. (2008). The program for infant toddler care. In J. P. Roopnarine, & J. E. Johnson (Eds.), *Approaches to early childhood education (5th ed.) (25-47)*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice Hall.
- Mann, M. B., & Carney, R. N. (2008). Building positive relationships in the lives of infants and toddlers in child care. In M. R. Jalongo (Ed.). *Enduring Bonds: The significance of interpersonal relationships in young children's lives* (pp. 147-157). New York: Springer.
- McMullen, M. B. (2013). Understanding development of infants and toddlers. In C. Copple, S. Bredekamp, D. Koraleck, & K. Charner (Eds.). *Developmentally appropriate practice: Focus on infants and toddlers* (pp. 23-50). Washington, DC: NAEYC.
- McMullen, M. B., Addleman, J., Fulford, A. M., Mooney, S., Moore, S., Sisk, S., & Zachariah, J. (2009). Learning to be me while coming to understand we: Encouraging prosocial babies in group settings. *Young Children, 64*(4), 20-28.
- McMullen, M. B. (2010). Confronting the baby blues: A social constructivist reflects on time spent in a behaviorist infant classroom. *Early Childhood Research and Practice, 12*(1), <http://ecrp.uiuc.edu/v12n1/mcmullen.html>
- McMullen, M. B., & Dixon, S. (2009). In support of a relationship-based approach to practice with infants and toddlers in the United States. In Brownlee, J. (Ed.). *Participatory learning and the early years* (pp. 109-128). London: Routledge.
- McMullen, M. B., Kim, H., Mihai, A., & Yun, N. R. (in press). Continuity of care in birth to 3: Perspectives of teachers, parents, and administrators. *Early Education & Development*.
- NAEYC (2011, May). *Code of ethical conduct: Supplement for early childhood program administrators (adopted 2006, reaffirmed 2011)*. Retrieved June 18, 2014 from: <http://www.naeyc.org/files/naeyc/file/positions/Supplement%20PS2011.pdf>
- Noddings, N. (2003). *Caring: A feminine approach to ethics and moral education (2nd ed.)*. Berkeley, CA: University of California Press.

Pianta, R. C., W., Barnett, S., & Justice, L. M. (Eds.) (2012). *Handbook on early childhood education*. New York: Guilford Press.

大阪総合保育大学総合保育研究所乳児保育プロジェクト（代表大方美香編著）（2014）乳児保育計画論～2つのタイプの事例を比較して～ ふくろう出版

大方美香他（2012）．保育所保育針指における乳児保育の実践構造の検討 —乳児保育研究その1— 大阪総合保育大学紀要7号

Riley, D., San Juan, R., Klinkner, J., & Ramminger, A. (2008). *Social & emotional development: Connecting science and practice in early childhood settings*. St. Paul, MN: Redleaf; Washington, DC: National Association for the Education of Young Children.

Zero to Three (2008). *Caring for infants and toddlers in groups*. Washington, D. C.: Author.

The Present and Future of Infant Care in the USA

Mika Oogata*, Tetsujun Tamaki*, Mary McMullen**

*Osaka University of Comprehensive Children Education

**Indiana University

This article is based upon a keynote speech delivered by Dr. Mary Benson McMullen to the Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education Annual Conference. This speech was delivered at one of the symposiums organized by the Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education Annual Conference, and the title of the symposium was “Infant Care in the US, Today and in the Future”. This article starts with seven philosophical principles of Developmentally Appropriate Practice (DAP) for birth to age three, which is defined by Dr. McMullen in the recent publication (McMullen, 2013). Relationship-based practices based upon DAP are then described, focusing on the examples of ‘continuity of care,’ and ‘primary caregiving assignments.’ Finally, there is a proposal on the way to adapt these philosophical guidelines and practices, especially relationship-based practices, for the development of infants and toddlers care in Japan. The background to hold this symposium is detailed as a Research Note in the last section.

Key words : infants and toddlers care, DAP, relation-based, continuity of care, primary caregiver